

第16回夏の講演会・講習会

8月7日（木）・8日（金） 於 京都府立聾学校

本会発足以降、大阪生野聴覚支援学校で行ってきた夏の講習会ですが、今年は京都聾学校に会場を移して、8月7、8日に実施しました。遠方ということもあり、参加者数は101名となりました。参加者からは、「大阪に比べアクセスの面で大変だった」という声も多い中、「いろいろな学校の施設が見られて良かった」「講演会が行われた聾学校内のゆめホールを初め、各教室を快適に使わせていただけた」「遠かったが移動が少なくてよかった」という感想も多く寄せられていました。

「一つの学校に負担がかからないよう配慮しつつ、できるだけ参加しやすい場所を」というご意見は、次年度の参考にさせていただきます。

開催にあたり教室の準備の面でご協力いただいた京都校のみなさんに、あらためて感謝申し上げます。

参加者の感想 ～アンケートより～

講演会

「聴覚障害児の書記リテラシーの基礎を築く
早期言語コミュニケーション」
筑波大学教授 廣田栄子先生

・新生児聴覚スクリーニングの効果と課題がデータを元に多面的に評価されていて、今後の医教連携のあり方と福祉とのつながり方に示唆をいただいた。

・早期の補聴の現状と課題を乳幼児の発達の視点で解説していただいた。

・拝聴しながら思ったのは、教師として生徒の能力をことを大事にしながらも、保護者の価値観に寄り添うことが子どもを伸ばす基本だということ。それを大事にしながら教育に向き合いたい。

・定型発達と比較しながらのお話はわかりやすく、聴覚障害への大切な手立てについて理解が深まった。後半の書記リテラシーの話をもっと詳しく聞きたかった。

・語としての形式や語彙の数よりも言語的な多様さ豊かさが大切だという話が印象的だった。

・子どもの言わんとすることの内容にしっかり注意し、言語の基盤を広げていくことの必要性をあらためて感じた。



講座Ⅰ

「聴覚障害への医学的アプローチ」 京都府立医科大学附属病院 兵庫 美砂子 先生

- ・聞こえのしくみや子どもの耳鼻科疾患についてなど、難しい内容をわかりやすくご説明いただきました。あらためて確認できたことや新しい知識も得られた。
- ・医療からの視点、考え方を学ぶことができて良かった。
- ・手元にも資料があり、難しい説明もなんとかついていけた。
- ・難聴の遺伝子診断や人工内耳についての情報なども大変興味深くうかがえた。
- ・兵庫先生のお話は、日々接する子どもたちの見えない部分がよくわかり、保護者への声のかけ方や対応について納得することが多かった。



「認知特性を考慮にいたした指導 「口話／手話」「生活言語／学習言語と絡めながら」 京都府立聾学校 脇中 起余子 先生

- ・脇中先生の経験や知識の取り入れ方（視覚的・聴覚的）などを踏まえての話がわかりやすく、何回も聞いているにもかかわらず、新鮮でとても勉強になった。
- ・聴覚障害の子どもたちの中にも、継次型の特性を持つ子どももたくさんいると思う。認知特性に留意することは大切だと思った。
- ・学習言語の獲得のために幼児期から大切にしなければならないことがよくわかった。自分にとってわかりやすい方法が必ずしも子どもにとってそうではないという話が印象に残った。
- ・聴覚障害だけでなく、他の障害種別の児童生徒にもあてはまる指導についても勉強させていただいた。



講座Ⅱ

「人工内耳の基礎」

- ・人工内耳について、最新の情報や状況が知れてよかった。
- ・マッピングを行うときの考え方から具体的な方法について知ることができ良かった。
- ・専門性の高い内容をわかりやすく説明してもらえたのが良かった。
- ・メーカーによつての違いやコード化法の違いなどは初めて聞いたのでとても勉強になった。
- ・しくみやコード化法によるきこえの違いの体験、マッピングの仕方や見方などを丁寧に指導いただき、理解を深めることができた。

「人工内耳の事例」

- ・和歌山、滋賀など他校からのおもさんの事例を中心に、各校のおもたちの様子や状況、課題などを共有できて、とても参考になった。
- ・ケースについて意見や質問も出されて、人工内耳装用児の様々な事例、課題があることを知ることができてよかった。
- ・いろいろなおもさんの事例とアドバイスが聞けてよかった。

「人工内耳の保守管理」

- ・実際の経験からくる事例が具体的でとても参考になった。

・相談を受けたときに知らないはずだと思って参加した。装用者カードや実際にマップがとんでしまったときの状況など、わかりやすいお話でした。

- ・日常を想定した具体的な話で有用だった。
- ・3社すべての実物があり、わかりやすかった。
- ・人工内耳の管理にほとんどタッチしていない現状を改善しなければと感じた。



「聞こえのしくみと聴力測定」

- ・乳児に行っているVTRや脳で聞いていることを実証する番組、難聴体験などよい勉強になった。
- ・視覚支援を行うことの大切さがよくわかった。
- ・難聴体験では、周りの様子を見ながら状況把握するのに神経を使った。
- ・動画で音が入っていく様子がわかりやすく、興味深い内容が盛りだくさんだった。



「オーディオグラムと補聴器の特性表」

- ・大変わかりやすく、演習も含まれていてよかった。丁寧な説明で聾学校教員にとっては、必須の内容だと思った。
- ・大変わかりやすい説明の仕方、初心者にはありがたかったです。
- ・ちょっと一息という時間（動物のきこえ方、見え方、片目をつぶってボールを受ける等）もあり、余談もあって、最後まで集中して話が聞けました。
- ・幼稚部の保護者への講義、講座などの参考になると思いながら拝聴した。

「福祉制度」

- ・なんとなく知ってはいたことを、整理して新しい情報も加えて示してくださりわかりやすかった。
- ・「単に、子どもに補聴器が与えられているのではない、どういうことになって子どもが補聴器を手にすることができているのか」を伝えることなどは、早速2学期の授業などで触れていきたいと思った。
- ・他府県の例を具体的に紹介していただき、自治体によって大きく違う点があることを知った。
- ・保護者に聞かれてすぐに返せないことが多いので、とても参考になった。

「補聴器の機能」

- ・基礎的な知識を再確認することができ、気軽に質問もできて大変ありがたかった。
- ・指向性や圧縮についての話が、実際の補聴器のきこえ方を通して理解できてよかった。
- ・補聴器のフィッティング事例も紹介してもらって参考になった。
- ・補聴器を触ったことがなかったので、難しかったけれど理論はわかった。



「補聴器のしくみと保守管理」

- ・わかりやすくて実践できそうなことがたくさんあった。

- ・初心者向けの講習だったので、一から説明していただけてとても参考になった。
- ・4月に赴任して補聴器について詳しい説明もほとんどないままだった。児童と同じ補聴器を扱っていただいたので、しくみや管理方法をまとめて知ることができ勉強になった。
- ・子どもたちがどの程度のことを知っていなければいけないのか、何を自分でできるようになっておかなければいけないのか、2学期からの自立活動計画を見直す良い機会になった。子どもの将来を見据えて話をしていただけたので、とてもわかりやすかった。

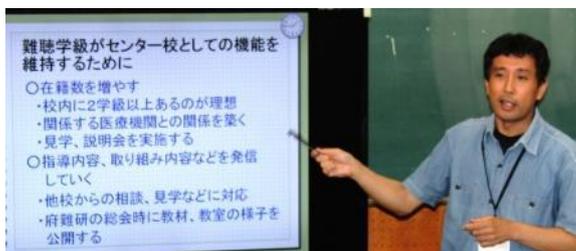


「はじめての補聴器フィッティング」

- ・内容的に難しかったが、丁寧に説明していただきよかった。
- ・まったく初めての私にもわかりやすかった。
- ・そもそもフィッティングには、どんな機械が必要か、などというところから、もっと聞いてみたかった。
- ・大変丁寧に教えていただいたので、全く初めての私でもわかりやすかった。

「難聴学級での指導」「難聴学級の取り組み」

- ・経験豊かな先生のお話を聞いて、2学期からの教育に生かしていきたいと思った。専門性を身につけて、学校全体を巻き込んで難聴教育をしていきたい。
- ・私達のニーズに合わせて、先生の取り組みや学校での活動をわかりやすく説明していただいた。私達にもわかりやすいパワーポイントで、授業でもわかりやすいのだろうと思った。
- ・情報は他者から保障してもらってあたりまえという自校の子どもの姿が気になっていた。難聴学級の担任は、子どもがつかず前、困る前に支援しすぎていると感じる。先生方のお話を聞いて、自分で情報を取りに行くことのできる子に向けて、取り組みを進めていきたい。
- ・私も難聴学級担任ですが、まだまだできていないことが多いと感じた。参考にして取り組みを進めたい。



「地域支援」

- ・先生が使用されているスライドや授業（研修）内容を多用していただき、地域支援の内容が少しイメージできた。
- ・いろいろな難聴体験の方法を学ぶことができた。難聴体験として、音声の加工したものを聞くことができてよかった。
- ・体験でわかることもたくさんあると改めて思った。
- ・体験や事例を交えて話をしてくださり興味深く聞かせていただいた。
- ・地域の小学校に送り出すために、私自身に必要なこと、地域の先生に伝えたいことが明確になった。

「幼稚部の自立活動」

- ・ヒントになる内容がいろいろあり、嬉しく思った。
- ・同じ教材でも、他にどのように使えるかなども丁寧に教えてくださりありがたかった。
- ・ビデオで実際の指導場面を見ることができ、ゲームの内容や保育方法を教えていただけたので、明日からの保育に是非役立てたい。



- ・まず「楽しい！」と思えることが第一、ということが本当に大事で、実践の中に子どもを第一に考える姿勢が一貫してあり、自校でもそうあってほしいと思った。
- ・5才児さんの事例で、サブの先生との連携も上手にされていて、学びたいと思った。

「小学部の自立活動」

- ・小学部の自立活動とは何か、何を大切にすべきかを教えていただいた。
- ・3つの要素がわかりやすく説明されていた。たくさんの発音指導を具体的な例で見たのは初めてだったので新鮮だった。
- ・他校の取り組みを知ることができ、2学期以降の授業でも取り入れていけたらと思った。
- ・興味深いお話の内容だった。

秋の講演会

～日本教育オーディオロジー研究会共催～

9月15日（月祝） 於 たかつガーデン

今年の秋の講演会は、日本教育オーディオロジー研究会との共催でしたので、上級講座参加者と合わせて100名余りの参加でした。人工内耳両耳装用についてや、装用後の児童生徒のアンケート調査、読み書きの力など、今まさに現場でとりあげられている諸問題について研修することができました。参加者の声から、講演の様子を紹介します。

「学齢期にある人工内耳装用児の実際」

大東文化大学 教授 齋藤 友介 先生

【両耳装用・人工内耳一般】

・両耳装用した方があたかも効果があるように聞かすが、実際はそうではないことが資料を通してよく感じた。理解していることを児童がどう表出し、また周囲がどうみとるのは人工内耳でも補聴器でも同じだと思う。心の成長あるいは外部と自分の想いをどうつなげられるのかについて、教師として常に刺激を受け、思いを共有することが大切だと思った。

・「病院」で「医師」に言われることは絶対で、きこえより他の課題が大きいと思われる子どもが両耳装用手術に向かう状況に考え込んでしまう。

・人工内耳装用児（以下C I児）の実態はひとり一人のケースでそれぞれに違い、対応している教師は子どもの実態に合うように工夫している。C I児ならではの配慮や工夫について、共通するところと個々の課題に丁寧に対応するところとあると思う。齋藤先生のお話から、漠然としていたC I児の実態に対しての課題や対応について整理できそうだ。

【学力等との関連】

・「人工内耳をすればふつうの人になる」という保護者が多い中、また教員自身の迷う中、効果の程が明確でないことが分り（特に学力）、保護者説明の助けになった。ろう学校でもよりその専門性を活かし、合理的配慮をしていきたい。

・国語力の読み書きのデータは実際に即していてその通りだと思った。この不足している状態をどうしていくのかが大きな課題だと感じる。





- ・言語力の伸びの差について、人工内耳の手術をしても、やはり難聴であり、医療だけでなく教育的な支援の対象であることを改めて考えさせられた。
- ・C I児の言語力について、データに基づいて説明くださりよく理解できた。大切なのは、人工内耳をつけるということだけでなく、その後の情報保障をその子のニーズに合わせてどう行っていくのかであることがはっきりわかった。その点では補聴器と変わらないことがよくわかった。

【通常学級指導や軽・中等度難聴児の指導】

- ・小学校で学ぶ聴覚障害児のうち半数以上が通常学級でのみ授業を受けていると聞き驚いた。それならば、通常学級における情報保障の配慮や環境整備がもっと必要なのではないかと思った。
- ・通常学級で学ぶ難聴児に対する合理的配慮を考える場合に、共通理解しておくべき枠組みを作る上での参考になった。
- ・学齢期で、装用後、一般小学校に入学していく子どもが多いのは、補聴器で言語力をつけていく実績が乏しいということが考えられる。聾学校教員の指導力の低下が原因の一つと思う。

【障害認識など】

- ・A君、B君の事例で、特にA君は自ら希望してノートテークを利用していた。このように、本人の意志が確認できるよう、両耳装用について自己決定ができる力をつけたい。
- ・メーカーからは「(両耳装用で)聞こえる子どものように育てている」とうたわれているが、成績がいいだけでなく「心の理論」もうまく育てている子はそんなにいない(遅れている)というお話を聞いてまさにその通りだと感じながら聞いていた。年相応の話し方や言葉づかいを獲得・活用するなど心の面での成長に関しては「聞こえる子ども＝普通」には程遠い大人も子どももたくさんいるなあと感じている。それがデータにも出ているのだと感じると共に「じゃあどうすれば？」というところを模索していかなければならないのだと思った。

【関係機関との連携】

- ・医師や病院の言語聴覚士(以下ST)との連携の必要性をより強く感じる。保護者支援がスムーズにできるよう、関係機関の職員が共通認識を持てたらと思う。
- ・医療現場でのSTの子どもへの関わりと、教育現場での関わりとでは、支援の方法に少しずつ偏りがあるように感じる。医療現場では医療の考えが中心であり、教育現場では勉強面で困らないよう、いかに学校現場を改善していくかが中心になっていると思われる。医療と教育をつなぐ役目をSTがもっと努める必要があると考えている。

今後の予定

冬の学習会 平成27年1月30日(土) 滋賀県

「聞こえに困難をもつ子どもたちの支援(仮)」

「当科における人工内耳医療 ーより個別的に より細やかに」

*詳細は12月頃に発送します お楽しみに・・・

近畿教育オーディオロジー研究協議会事務局

〒591-8034

大阪府堺市北区百舌鳥陵南町1丁

大阪府立堺聴覚特別支援学校内

事務局長 松川 雅一

TEL: 072-257-5471

FAX: 072-257-3310

メール: kinki02062@hotmail.co.jp